フィールドワークの始まり

山野香織

私は、エチオピア農村部における人びとの飲酒空間や社会関係に関する研究テーマから、アメリカ合衆国へ渡ったエチオピア移民たちのエスニシティや地域を越えたネットワークの形成へと関心をひろげ、2008 年からワシントン D.C. でフィールドワークをはじめた。ワシントン D.C.を中心とした首都圏は、米国で最もエチオピア移民人口が多いといわれている。移民の主な背景は、エリート階級の頭脳流出、エチオピア社会主義の独裁政権が始まった 1974 年以降の政治的亡命者、干ばつによる難民、現政権が始まる 1991 年以降の亡命者、1990 年以降の移民多様化プログラムによる移住などがある。また、家族の呼び寄せによって移民はさらに増加し、2 世代目を合わせると、ワシントン首都圏で約 20 万人のエチオピア人が居住しているといわれる。

ワシントン D.C.に着いた当初、エチオピア移民の知り合いもおらず、また彼らの生活に関わる情報を得られる機会がかぎられていた。そのため、彼らと知り合うこと、そして彼らの活動に関わる情報を収集することからはじめようと、インターネットや新聞などを手がかりに、エチオピア料理店が集まる商業地区を中心に歩いた。まず、エスニック料理店が立ち並ぶアダムス・モルガン地区に何軒かのエチオピア料理店があるとの情報を得て、訪問してみた。店の建物には、緑、赤、黄色のエチオピア国旗が飾られてあるのですぐに分かる。エチオピア人の客が多そうな店に入って情報収集をしてみると、ユーナイン（U 通りと 9 番通りの交差したエリア）の方が、エチオピア人の店が密集しているとのことだった。

写真１　ワシントン D.C.にある小さなエチオピアン・カフェ。とくにお昼は常連客でにぎわっている。（2009 年 7 月撮影）

ユーナインは通称「リトル・エチオピア」と呼ばれている地域で、エチオピア料理店やカフェ・バーのほか、エチオピア人向けのイエローページを発行している事務所やコミュニティ・センター、ヘアサロンや CD 屋などがある。なかでも繁盛していそうなカフェに入ってみると、アダムス・モルガンで情報収集した時に見かけたエチオピア人男性と偶然再会した。そして彼の隣には、私と同年代くらいの、ヨルダノスというエチオピア人女性がいた。

　彼女は、家族の呼び寄せで渡米し、ワシントン市内で一人暮らしをしていた。私が彼女と出会ったときは、彼女が渡米してまもないころで、英語でのコミュニケーションに不自由やもどかしさをかんじていたときだったのかもしれない。彼女は、エチオピアの公用語であるアムハラ語を理解できる日本人の私を快く

受け入れてくれた。私も渡米したばかりでなかなか知り合いも出来なかった頃であったので、ヨルダノスとはすぐに打ち解け親しくなった。その頃、ヨルダノスは別のエチオピア人が経営するカフェで接客のアルバイトをしていた。その店はユーナインの大通りから少し奥まった場所に位置しており、住宅街のなかにぽつんとあるような小さな店だった。アダムス・モルガンやユーナインに並ぶ店のように、エチオピア国旗などの装飾もなく、店の外からだけでは一般のカフェと変わらない。店に入ると、エチオピアの民族のポスターが飾られていて、カウンター5 席とテーブル 12 席がある。オーナーのエチオピア人男性と、アルバイトの従業員 2 人が接客をしている。メニューは、インジェラ（クレープ状のパン）とワット（唐辛子ベースの煮込み料理）を中心としたエチオピア料理のほか、ライスやサンドイッチなど一般のカフェのメニューも取りそろえてある。

写真２　カフェで食事をする常連客の男性。（2009 年 7 月撮影）

私は、そんな彼女のバイト先に毎日あそびにいくようになった。彼女は持ち前の明るさで、どの客に対してもフレンドリーにふるまっていた。しかし、彼女は接客で忙しく、ときおり様子を見に来てくれるものの、私はそこに来る常連客のエチオピア人男性たちと会話することの方が多くなっていった。常連客の多くは、エチオピアに 70 以上あるといわれる民族のうちのオロモという民族集団の出自で、政治難民として米国へ渡ってきた人たちであった。彼らはアムハラ語ではなくオロモ語を使い、「エチオピア人」より「オロモ人」と呼ばれることを好んだ。アムハラ語しか知らない私に対し、彼らは、「オロモのことを知りたいなら、オロモ・センターに行ってみるといいよ」と言って連絡先を教えてくれた。オロモ・センターは、オロモの移民たちが定期的に集まって交流する場である。

この常連客たちとの出会いにより、私はオロモ・センターにも足を運ぶようになり、オロモとしての彼らが抱えるエスニシティ、ナショナリティの問題、オロモ同士のネットワーク、エチオピア移民の内部で生じている民族同士の葛藤について関心を抱くようになった。私のフィールドワークはこの時から本格的に始まった。

写真３　ワシントン在住オロモ人による感謝祭（イレチャ）が毎年隣州の湖畔でおこなわれる。（2010 年 10 月撮影）

食事と談話を終え、徐々に客が減っていくと、一区切りついたヨルダノスが私の隣にやってきて昼食を食べはじめた。少し疲れた表情だった。まかないのインジェラと、シロという豆の粉を煮込んだシチューを手で一口サイズに包んで、私の口に運んでくれた。親しみを示す仕草である。

その後、オロモの人を対象にフィールドワークをすすめる過程で、単身で渡米したエチオピア人女性がアメリカで生きていく困難さとともに喜びがあるということがみえてきた。現在、ヨルダノスは一般の正社員として事務職に就いている。彼女とは携帯やメールで時々話しをする程度となった。しかし、研究対象としてだけではなく、私をアメリカのエチオピア人コミュニティへ誘ってくれた大切な友人として、今後も関わっていかせてもらうことで、ディアスポラとして生きるエチオピアの人たちを深く理解していきたいと思っている。